

句語二時ヲ課ス

數學科、物理學科、星學科志望者ニハ第三年ニ於テ化學實驗、測量三時ヲ課ス

農科ニ於テ各學科志望者ニハ第三年ニ於テ圖畫ヲ缺キ動物及植物四時ヲ課ス

農學科、農藝化學科、獸醫學科志望者ニハ第三年ニ於テ數學ヲ缺ク林學科、志望者ニハ第三年ニ於テ英語ヲ缺ク

農學科、農藝化學科、林學科志望者ニハ第三年ニ於テ測量三時ヲ課ス

獸醫學科志望者ニハ隨意科トシテ第三年ニ於テ羅句語二時ヲ課ス

大學豫科第三部(醫科)課程表

第三部課程表

學科	學年			學科	學年		
	第一	第二	第三		第一	第二	第三
倫理			一	物理		三	講義 三
國語	三			化學			講義 三
獨語	一三	一三	一〇	動物及植物	四	三	講義 三
英語又ハ佛語	三	三	三	體操	三	三	實驗 三
羅句語			三	計	二九	三〇	
數學	三	二					三

右に就いて多少の説明を加ふれば、第一部に於ては、第三年の専門的類別を除き、倫理は第三年のみに之を課し、地理・數學・物理・化學・動物及植物・地質及礦物・經濟通論を廢して、論理及び心理を加へ、法科大學志望者には經濟通論を缺き、哲學科志望者には論理・心理を缺き、その代りに數學と物理とを課し、法科大學志望者には、隨意科として羅句語を課することを得しめ、第二部に於ては、大差なきも志望學科に依りては、學課に多少の相違があり、倫理は、第一・第三部と同じく、第三年へのみ之を課し、漢文は、第二・第三部より之を除き、第三部に於ては、學科に異同はない。總じて之を言へば、外國語の尊重は著しいことで、即ち、従前之を第一・第二に分ち、第二外國語は隨意科としてゐたのを、英獨佛語中、必ず二箇國語を選ばしめると共に、その時間數を増したのである。而してこの改正學科課程は、その後大正七年に至るまで、大なる變更もなかつたのである。

所謂赤丸の發表

而して三十三年には、評議員假規程並に教授會規程を設け、三十六年度からは、所謂赤丸の發表を爲した。今日第一學期評點六十未滿ノモノニ限り朱印ヲ以テ發表候ニ就テハ御受持科目ノ評點特ニ劣等ノ生徒即チ五十點未滿ノ者ニ對シテハ便宜十分ニ御訓告相成候様致度尙ホ今後評點又ハ成績發表ノ際モ右同様ト御了知相成度過般ノ教員會議ノ精神ニ基キ此段得貴意候也。

一月十三日

渡邊 教頭

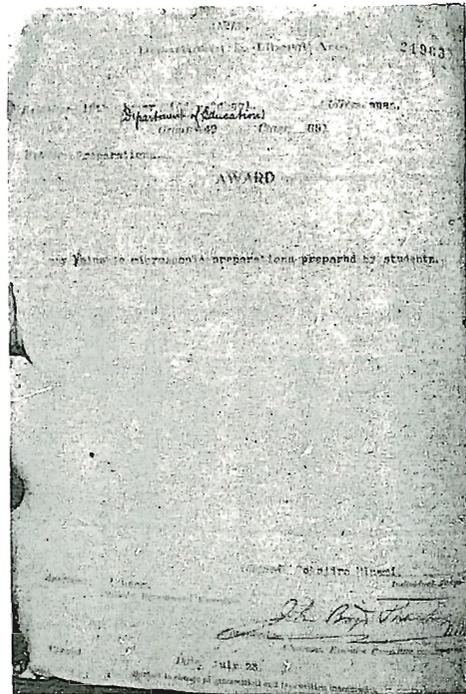
第四節 其後の醫學部と分立

藥學科の増設と本校の定員増加

長崎に於ける醫學部は、明治二十三年三月、文部省令第二號を以て藥學科を加へ、同年六月には、其の人員を百人と定められ、之が爲に我が第五高等學校は、總人員實に一千一百九十人の多きに達し、九月一日より國語及漢文（漢字交り作文及漢文講讀）、英語（讀方・譯讀・書取・文法）、數學（算術・代數・幾何）、博物學（大意）、

新築校舍へ移轉

開校式舉行



化學（大意）の學科試験並に體格検査を以て、藥學科の入學試験を施行したのであるが、翌年九月には、長崎縣西彼杵郡浦上山里村の新築校舍に移轉し、在來の校舍は之を分教場に充て、四年生の教授所と爲し、二十五年三月七日開行式の舉行した。今、二十五年四月四日の官報に據つて概況を示せば左の通りである。

第五高等學校醫學部開校式
並卒業證書授與式

第五高等中學校醫學部ハ長崎西彼杵郡

浦上山里村ノ新築竣工セルヲ以テ去年七月七日開校式並ニ第三回卒業證書授與式ヲ與行セリ其次第八當日午前十一時生徒一同式場ニ入り（海軍奏樂）尋テ來賓一同入場（海軍奏樂）文部大臣官房會計課長新築竣工ノ報告ヲ爲シ文部大臣代理文部次官本學部ノ關輪ヲ主事ニ授ケ文部次官、本學校長、本學部主事ノ演述（海軍奏樂）長

崎縣知事代理書記官及來賓ノ祝辭（海軍奏樂）本學部主事卒業生ニ卒業證書ヲ授與シテ主事告示卒業樂生總代答辭ヲ述へ（海軍奏樂）右ニテ式全ク了リ來賓隨意部内ヲ順覽シ一同會食（此間奏樂）午後五時來賓一同悉ク退散セリ此日天氣朗ナラス時々細雨降リシニ拘ラス來賓ハ本學部設置區域内各縣知事代理書記官參事官、各中學校長、長崎在住各高等官及各國領事、兩院議員、縣會議員其他紳士紳商無慮五百餘人ナリ又翌日公衆ニ校内ノ從覽ヲ許シタリ當日ノ報告祝辭ハ左ノ如シ（文部省）

永井課長の報告

文部大臣官房會計課長永井久一郎ノ報告

瓊浦ノ上山里ノ村山ニ背シ水ニ面ス高燥開豁塵囂ノ市ニ遠ク幽靜ノ境ヲ占ム是レ第五高等中學校醫學部ノ地ナリ今ヤ校舍ノ新築竣工ヲ告ケ茲ニ住辰ヲトシテ開校ノ式ヲ舉ケラル小官職ヲ文部ノ財務ニ奉シ此盛式ニ與リ新築ニ關スル頭末ヲ報告スルヲ得ルハ最モ光榮ト爲ス所ナリ抑々本醫學部ハ明治十九年四月中學校令ノ發布ニ基キ明治二十年八月ヲ以テ長崎ニ設置スルコトヲ定メラレタリ地ヲ此ニ相シ草棘ヲ伐リ道路ヲ開キ新築ノ事ニ著手セシハ實ニ明治二十二年七月ナリ當時文部技師工學博士山口半六氏ハ文部大臣閣下ノ旨ヲ承ケ同僚工學士久留正道氏ト協議シテ設計ヲ擔任シ爾後文部書記官浦原忠藏氏等ト共ニ工事ヲ監督ス地勢ハ木石ノ運搬ナラス工費ハ建築ノ面積ニ應シ充分ナラサルニモ拘ラス校舍規模宏壯ニシテ其構造完備シ豫定ノ期日ニ先チ竣工ヲ見ルニ至リタルハ建築ニ從事セル諸氏ノ勸勵措置宜ヲ得タルニ由ラスンハアラサルナリ然リ而シテ土地買収及校舍新築ノ費用ニ就キ其財源ヲ尋ヌルニ長崎縣ハ地方税金四萬三千圓寄附金七千圓合計五萬圓ヲ支出シ加之舊縣立甲種醫學校土地建物ヲ文部省ニ差出シタリ本縣知事閣下縣會議員及有志者諸君等ハ醫學

及藥學ノ教育當世ニ最モ必要ナルヲ認メラレ本醫學部ノ建築ニ關シテハ直接ニ間接ニ熱心盡力セレタルコト小官ノ深ク感佩スル所ニシテ今日ノ盛式ヲ舉ケラル、ニ至リタルモ亦閣下及諸君ノ贊助ニ由ラスンハアラス新築ニ要シタル費額概算金五萬三千圓餘ハ本醫學部ノ經費ヲ以テ支辨セリ土地建物ノ坪數及工費ノ區別ハ概略左ノ如シ

一長崎縣西彼杵郡浦上山里村土地一萬七千八百二十二坪餘

此買收費金七千六百二十五圓九十三錢二厘

一本校舎木造平家二百三坪二階家六十五坪及廊下等五十坪餘

此建築費金七千八百十五圓九十錢五厘

一講義室二棟木造平家八十一坪

此建築費金二千八百二十三圓九十六錢二厘

一生理學竝解剖組織學講義室二棟木造平家百六十八坪

此建築費金五千七十八圓四十七錢六厘

一解剖實習室竝屍室及廊下木造平家三十六坪

此建築費金八百九十三圓八十四錢五厘

一病理解剖教室木造平家三十坪

此建築費金八百七十七圓四十一錢

一治療病室竝附屬家木造平家三百五十六坪餘

此建築費金七千七百五十圓二十一錢三厘

一製煉室土藏物置銃器室等百七坪餘

此建築費金二千四百九十三圓二十一錢一厘

一寄宿舎木造二階家二百八十八坪餘竝食堂賄所附屬家二百七十七坪餘

此建築費金一萬千二百九十七圓五錢一厘

以上建築ノ主要ナルモノニシテ道路敷地買收土地全體均シ堀井下水道路土堤一切ノ雜費計金六千三百圓餘ナリ

此報告ヲ終ルニ先チ數言ヲ附述セントス長崎ハ往年唯一ノ互市場ニシテ海外ノ文物本邦ニ傳來セシモノ皆此要港ヲ經由セサルナク醫學ノ如キ固ヨリ然リトス而シテ本邦ニ於テ醫學病院ヲ設ケテ泰西ノ醫學ヲ教授シタルハ長崎ノ養生所ヲ以テ嚆矢トス是レ文久元年ノ事ナリ爾後三十年ノ星霜ヲ閱シ數多ノ沿革ヲ經テ弛張伸縮アリト雖モ醫學教育ノ系統ハ此地ニ斷絶セス今日第五高等中學校醫學部ヲ設置セラル、豈ニ偶然ナランヤ聞ク所ニ依レハ古來海外ノ文物ヲ輸入シタルト同時ニ痘瘡梅毒ノ如キモ亦長崎ヨリ輸入シタリ又近年數回虎列刺病ノ猖獗ヲ全國ニ逞セシヤ其源泉ヲ長崎ニ發セシモノ多シト云フ他年黃熱「ベスト」ノ如キヲ本港ニ輸入シ來ルヤモ亦知ルヘカラス宜ク戒慎スヘキナリ要スルニ九州ハ其地勢ニ依リ清國ノ南部印度及南洋諸島等ノ交通頗ル頻繁ナルノミナラス氣候溫熱人口稠密ニシテ傳染病其他特異病ノ跡ヲ絶チシコトナク人ノ生命健

康ヲ損傷スルノ害因太タ多シ衛生ノ道大ニ講明セサルヘカラス此ニ至テ之ヲ思ヘハ本醫學部ノ設置ハ其緊要ヲ感スルコト益々深シ自今年々多數ノ卒業生ヲ輩出シ適格ノ醫師及藥劑師ヲシテ九州ノ全土ニ普及セシメントトヲ期セサルヘカラス謹テ祈ル本醫學部ノ事業年ヲ遂テ愈々隆盛ニ赴キ九州地方ノ福祉無疆ナランコトヲ辻文武次官ノ祝辭(省略)

第五高等中學校長ノ祝詞(省略)

醫學部主事吉田健康演述ノ大意

吉田主事の演述

本學部校舍經營其工ヲ竣リ本日文部次官閣下親臨茲ニ開校ノ盛典ヲ舉行セラル不肖健康乏シキヲ醫學部主事ニ受クルヲ以テ此ノ舉ニ陪スルヲ得何ノ光榮カ之ニ過ンヤ抑モ本學部ノ創立タル明治二十一年四月假リニ舊長崎醫學校ヲトシ開設シタルヲ以テ規模狹隘ニシテ教場ノ配置宜シキヲ得ス從テ授業上不便亦少ナシトセス然レトモ今ヤ建築其工ヲ告ケ書籍器械亦具備スルニ至レハ爾來倍々教職員ト協同一致專ラカヲ生徒陶冶ニ盡シ愈々隆盛ノ域ニ進マシメント欲スルナリ夫レ本學部ヲ當初長崎ノ地ニ設置セラレシハ固ヨリ種々ノ原因アリト雖モ其最大原因ハ長崎力從來ニ是テ我國ノ醫學上ニ幾多ノ功勞履歴アルニ存スルナルヘシ故ニ今茲ニ我國ノ上世ニ於ケル醫事ノ狀態ヨリシテ泰西醫術ノ我國ニ渡來セシ概況ヲ述ヘ更ニ長崎ノ醫事上ニ於ケル履歴ノ大略ヲ陳スルハ又敢テ贅事ニ非サル可ヘシ

案スルニ我國ニハ上古ヨリ醫師ナキニアラス又病院ハ推古天皇施藥悲田ノ諸院ヲ設立セラレシニ始マリタレハ我國ノ醫事ハ已ニ二千餘年前ニ胚胎セシモノト謂フヘシ然レトモ惜哉醫術ヲ行フモノ漸ク増加スルニ從ヒテ阿諛迎合刀圭ヲ賣弄スルノ徒陸續世間ニ輩出シ實學ノ醫流ハ世人ノ之ヲ敬信スルモノ少ナク一ハ無學ニシテ富ミ一ハ博學ニシテ貧シグ榮辱利害其身ニ切ナルニ至リテ學ヲ修ムルモノ日ニ減シ術ヲ弄スルモノ日ニ加ハル遂ニハ活計糊口ノ一賤業トナリ其甚シキニ至リテハ病羸世用ニ堪ヘサルモノ或ハ貧困生計ノ資ナキモノ一藥ノ功能ヲ知ラス病ノ一病原理ヲ詳ニセス自カラ醫師ト稱シテ恬然耻ツルナク世人之レヲ許シテ疑ハス其極此種ノ自稱醫天下ニ充滿シテ真正ノ醫道ハ蕩然地ヲ掃フニ至レリ

年換ハリ星移リ德川氏ノ季世一タヒ米艦ノ浦賀ニ來泊セシヨリ天下ノ事物靡然トシテ一變シ吾醫學ノ如キモ亦タ從來ノ狀態ニ安ンスルコト能ハサルコト、ナリヌ然リ而シテ當時此ノ長崎ハ尤モ繁華ナル互市場ナリシヲ以テ夫ノシーボルト氏ノ如ク市中ニ開業シ或ハ百患ヲ治療シ或ハ子弟ヲ教育スル等或國ノ醫事ニ向フテ大裨益ヲ與エシ外醫モ實ニ少ナカラサリシナリ今ヲ距ルコト三十餘年即チ安政年間幕府蘭人ボンベ氏ヲ常長崎ニ聘シ醫術ヲ傳習セシム之即チ公然泰西ノ醫術ヲ本邦ニ輸入セシ濫觴ニシテ前キノ陸軍々醫總監松本順氏等ノ學ハ當時ニ成リシモノナリ其後文久元年即チ今ヲ距ルコト三十年前松本氏ボンベ氏ト共ニ幕府ニ請願シテ病院ヲ創立シ傍ラ學塾ヲ設ケ施治ノ際生徒ヲ教導セリ名ケテ精得館ト云ヒ又一名ヲ養生所ト呼ヘリ之レ即チ洋流病院ノ嚆矢ニシテ方今尙一棟ヲ殘ス之レヲ今日ノモノニ比較スルトキハ其建築粗造ニシテ或ハ病院則ニ戻ル處アルヘケレトモ其當時創立者ノ辛苦經營ハ蓋シ健康カ想像ノ及ハサル程ナラン文久二年ポートイン氏ボンベ氏ニ代リテ擢識溫篤ノ資ヲ以テ教諭懇ロニ到リ治療洽ク及フ緒方戶塚ノ諸賢ヲ始メトシ其教導ヲ受ケシ者數百人又氏ニ親炙セルモノト雖モ當時斯道ニ從事スルモノニシテ其ノ治轍ヲ蹈マサルモノハ蓋シ少ナク慶應二年ポートイン氏國

ニ歸リマンスフエルト氏之レニ代ル學術ポートイン氏ト優劣ナキモ時日久シカラス徳望未タ顯レス之ニ加フルニ國事紛擾諸賢分散シ病院人ナキヲ以テ衰頽殆ント極マルマンスフエルト氏ノ技倆ニ由リテ僅カニ餘喘ヲ通スルノミ此時ニ當テ世運一變シ大政至尊ニ出テ百廢悉ク舉リ萬機振フ時ノ長崎府知事深ク醫道ノ衰頽ヲ歎キ經營頗ル勉ム明治元年八月判事井上氏病院ニ臨シテ生徒ヲ勵マシ且ツ塾則ヲ編成シ更ラニ朝ニ請ヒ精得館ノ名ヲ改メテ長崎府醫學校トシ又理化教師トシテケールツ氏ヲ和蘭ニ聘シ大ニ書籍器械ヲ買ヒ新塾ヲ開キ解剖局ヲ建ツル等百事更ラニ進緒ヲ啓ク蓋シ現在ノ本部分教場ハ此ノ際ノ建築ニ係ルモノトス而シテ當時ニ在リテハ今ノ宮中顧問官長與專齋氏等ノ諸士專ラ教授ノ大任ニ方レリ既ニシテ東京大學校ノ所轄トナリ其後又文部省ノ直轄トナリ學堂再ヒ増加シテ大ヒニ振ヒシカ明治七年臺灣ノ役アルニ會シ長崎醫學校廢セラレ臨時軍病院トナリ以テ翌年ニ至ル明治八年ノ始メ當時ノ長崎縣令宮川氏官ニ若干ノ補助金ヲ仰キ茲ニ縣立病院ヲ起シ醫學校ヲ附屬シテ患者ヲ治療セシメ傍ラ生徒ヲ教育セシム是レ即チ長崎醫學校ノ始メナリ其後數年ヲ經テ長崎醫學校ハ進化シ甲種ノ二字ヲ戴キ六年ノ星霜ヲ經即チ二十一年三月三十一日ヲ以テ甲種長崎醫學校茲ニ湮焉長逝シ之ニ代ツテ生レ來ルモノハ即チ本學部ナリ嗚呼當地ハ西陲ノ一小都タルニ拘ハラズ醫術輸入ノ間屋トナリ名醫湧出ノ泉源タルコト茲ニ三十餘年其間固ヨリ幾多ノ盛衰アリト雖モ其本學部ノ醫學上ニ尤モ確實ニシテ尤モ久シキ履歴ヲ有スルハ爭フ可ラサルノ事實ニシテ於是手當長崎ニ醫學部ヲト置セラレシハ抑モ偶然ニ非ルナリ是ヨリ進テ本學部力國家ニ對シ荷フ處ノ責務ヲ簡單ニ述ヘンニ本學部設置區域内ニ於テ醫師ノ總數ヲ人口ニ對照スルトキハ其數ノ多キヲ感スルモ其中ニ就キ醫科大學或ハ醫學部又ハ醫學校等ヲ卒業シ開明ノ學術ヲ攻シタルモノハ其

數驚クヘキ程ニ僅少ナリ今區域内醫師ノ總數ニ付其比例ヲ取レハ各學校卒業者等ニ尙内務省開業試驗ニ及第シタル者マテヲ合算スルモ其總數ニ對シ僅カニ百分ノ三十弱ニ過キスシテ其七十強ハ舉テ從來ノ開業醫ナリトス亦以テ開明ノ學術ヲ攻シタルモノ少キヲ見ルヘシ而シテ今本學部區域内人口五百七十九萬九千九百五十二人ニ對照セハ醫師總人員七千三百〇七人ナルヲ以テ醫師一人ニ付人口七百九十三人餘ノ割ニ當ル故ニ單ニ此割合ヲ以テ醫術ノ進歩シタル開明各國ニ對照スルトキハ醫師ノ人口ニ對スル割合多キカ如シト雖モ其實開明ノ學術ヲ攻シタルモノ百分ノ三十弱トシテ誤ナキモノトスルトキハ區域内ニテ其數僅カニ二千百九十二人餘トナリ其一人ニ對スル人口二千六百四十五人餘トナリ甚シク醫師ノ少數ナルヲ知得スヘシ尙進テ全國醫師ノ數ニ付其比例ヲ舉クレハ醫籍ニ名ヲ存スル者四萬〇二百十五人ニシテ此ノ内三萬〇〇三人ハ従前開業醫ナリト之レヲ區域内ノ比例ヨリシテ推究スレハ開明ノ學術ヲ攻シタルモノハ三分ノ一ニ過キスシテ之ヲ總人口ニ對比スルトキハ醫師ノ數僅少ナリトス然リ而シテ醫師ノ年々死亡及ヒ廢業スル者ハ前三箇年ノ平均數ニ據レハ千〇二十四人ナリト故ニ前陳不足ト死亡廢業ノ缺ヲ補ハンニハ頗ル多數ノ醫師ヲ輩出セシメサル可ラス然ルニ毎年平均帝國醫科大學ヲ卒業スル者ハ凡ソ四十人府縣立醫學校卒業ノ者ハ凡ソ百人トスレハ最多數ノ補缺ハ各高等中等校醫學部ノ責メニ任セサルヲ得サルモノトス然ラハ醫學部力國家ニ負フ處ノ責任ハ實ニ重且大ナルモノト云フヘシ故ニ本學部ニ於テハ竣工ノ校舍ト共ニ長ヘニ其ノ責任ヲ全フセンコトヲ期ス茲ニ謹テ寶祥ノ萬歲ヲ祝シ併テ來賓諸君ノ健康ヲ祈ル

醫學部主事吉田健康ノ告示(省略)

學科課程の改正

専門科とせらる

然るに明治二十七年六月二十三日勅令第七十五號に基いて、高等學校令がなるものが制定せられ、第二條は茲にも記した通り、「高等學校に専門學科ヲ教授スル所」を以て本體なし、醫學部もそれに伴うて學科課程も後表の如く改正せられたのである。而して附則第五條には、「本令は明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス云々」と記され、更に、「本令ヲ施行シ又ニ一部ヲ施行スル所ノ高等中學校ノ學科ヲ履修スル年限内ニ在ル生徒ノ爲ニ舊學科を存スルコトヲ得」と規定した結果、後述の如く卒業生に二種の別を生じたものである。而して文部省令第十五號第十六號及び明治三十年文部省令第三號に依つて専門科とせられ、其の修了者は醫學得業士と稱することを得しめ、元高等中學校醫學部卒業生は、卒業後三箇年の後、學力檢定を経て得業士と稱することを得しめられることとなつたのである。

醫學部醫學科課程表

學年	程度	第一年度			第二年度			第三年度			第四年度			
		一期	二期	三期										
醫學動物學	理論	二												
醫學植物學	理論		二											
醫學物理學	理論並實驗	四	三											
醫學化學	理論並實驗	六	六	三										

醫學科課程表

學年	程度	第一年度			第二年度			第三年度			第四年度			
		一期	二期	三期										
解剖學	理論	八												
解剖學	實習													
局所解剖	實習													
組織學	理論	一	二											
組織學	實習並顯微鏡用法													
生理學	理論並實驗				四	九	四							
生理學	理論					三	六	二						
病理學	理論							六						
病理學	病理解剖學並實習								六					
內科學	理論									二				
內科學	臨床實習									七	三			
內科學	精神病學									八	三			
內科學	小兒病學									一	二			
內科學	診斷學									二	三			
內科學	理論並實驗處方學									三	三			
藥物學	理論並實驗									四	三			
藥物學	調劑實習									二	三			
總論	理論									三				
各論	理論									三	三	三	三	三

合 計	體 操	法 醫 學	衛 生 學	產 婦 人 科 學		眼 科 學		外 科 學				
				婦 人 科 及 產 科 實 驗	產 科 理 論	臨 床 實 驗	理 論	手 術 實 習	繃 帶 實 習	皮 膚 病 及 微 毒 病 學	臨 床 實 習	
二四	三											
二四	三											
二五	三											
二八	三											
二九	三											
二九	三		二							二		
三七	二		二			二		四			二	七
三七	二		二			二	二	三			一	八
三七	二		二			二	一	三	二			八
三七	二	二		二	三	二						一〇
三七	二	二		二	二	三						一〇
三七	二	一		四	一	三						一〇

外國語ハ隨意科トシテ獨逸語ヲ四ヶ年間通シテ每週三時間ヲ課ス

醫學部藥學科課程表

學 科	程 度	學 年	藥 用 動 物 學		植 物 學	礦 物 學	物 理 學	化 學	分 析 學		衛 生 化 學		裁 判 化 學		生 藥 學	
			理 論	實 驗					理 論	實 驗	理 論	實 驗	理 論	實 驗	理 論	實 驗
第 一 年	一 期	二			五		三		六							
	二 期	三			三		四		六							
	三 期	二			三		二		六							
	一 期	三			三		三		三							
	二 期	三			三		三		三							
	三 期	二			三		二		六							
第 二 年	一 期	三			三		三		三							
	二 期	三			三		三		三							
	三 期	八			八		八		八							
第 三 年	一 期	五														
	二 期	六														
	三 期	六														

合 計	體 操	藥 品 鑑 定		製 藥 化 學		調 劑 學		藥 局 方	
		實 習	實 習	理 論	實 習	理 論	日 本 藥 局 方	外 國 藥 局 方 要 領	
二二三	三								
二二三	三								
二二二	三								
二二二	三								
二八	三			五					
二八	三			五		三			
二八	三			五	三				
三六	二	一〇	一〇		三			三	
三六	二	一〇	一〇		三				
三六	二	一〇	一〇		三				

外國語ハ隨意科トシテ獨逸語ヲ三ヶ年間通シテ每週三時間ヲ課ス

主事の免 而して三十年九月には、醫學部主事吉田健康氏卒去の爲、教授大谷周庵氏が同主事を命ぜられ、翌三十一年には大谷氏主事を免ぜられ、教授村上安藏氏が同主事を命ぜられ、同三十三年には田代正氏が代つたのである。今参考の爲に、三十三年までの卒業生並に同年の在校生を示せば左の通りである。

三十三年 までの卒業生

醫 學 科		藥 學 科	
第一回	明治二十二年 自七月 至十一月	第一回	明治二十六年 自九月 至十二月
第二回	同 二十三年 自七月 至廿四年二月		
	三八		九
	四三		九

三十三年 の在學生

明治三十三年在學生							明治三十三年在學生			
第三回	同 二十四年 自七月 至十二月	第一部	七	第一回	明治二十六年 自九月 至十二月	九				
第四回	同 二十五年 自七月 至九月	第一部	四	第二回	同 二十七年 自九月 至十二月	九				
第五回	同 同 同	第二部	一六							
第六回	同 二十六年 自四月 至七月	第一部	三							
第七回	同 同 同	第二部	二二							
第一回	同 同 同	第一部	六							
第二回	同 二十九年 自九月 至十二月	一部	二							
第三回	同 三十年 自九月 至十一月	一部	三							
第四回	同 三十一 自九月 至十二月	一部	四							
第五回	同 三十二 自九月 至十一月	一部	五							
			二							

級外生	六一	級外生	二三
四年級	八八	三年級	一五
三年級	八一	二年級	一七
二年級	九九	一年級	一二
一年級	一三二		

各醫學部の分立

然るに、明治三十二年頃より、學制改革の運動起り、三十三年には、小學校令の改正を見るに至り、三十四年四月一日には、第一・第二・第三・第四各高等學校醫學部は獨立して、夫々千葉・仙臺・岡山・金澤醫學專門學校となり、我が醫學部も、同時に分立して、長崎醫學專門學校と改稱せられ、茲に各高等學校は、工學部を有する本校を除いて、全く大學豫備教育機關となつたのである。

研瑤會の成立

次に記して置きたいのは、醫學部の校友會たる研瑤會に就いてである。即ち研瑤會は、本部に於ける龍南會の創立に刺激されて、明治二十八年、その成立を見たのである。

研瑤會會則

- 第一條 本會ハ醫學及藥學ニ關スル學術ヲ研究シ且會員相共ニ智徳ヲ磨キ身體ヲ練リ交誼ノ親密ヲ計ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ヲ研瑤會ト稱ス
- 第三條 本會事務所ヲ第五高等學校醫學部内ニ置ク

第四條 本會ハ名譽特別通常ノ三會員ヨリ成ル

- 第一項 名譽會員ハ第五高等學校醫學部職員ヨリ成ル且該部ニ縁故アルモノヲ以テ名譽會員ニ推薦スルコトアルヘシ

- 第二項 特別會員ハ第五高等學校醫學部卒業生ヨリ成ル

但卒業受驗生ハ特別會員ニ編入スルモノトス

- 第三項 通常會員ハ第五高等學校醫學部生徒（卒業受驗生ハ除ク）ヨリ成ル

- 第五條 本會ノ目的ヲ達成センカ爲メ左ノ事業ヲナス

- 第一項 毎年一月二月四月五月九月十月十一月第三土曜日ニ相會シ醫學藥學其他有益ナル學術上ノ演說討論及談話ヲナス

- 第二項 當分ノ内毎年四回三月六月九月十二月 本會ニ有益ナル學說實驗會員ノ動靜及本學部沿革ヲ知ランカ爲メニ雜誌ヲ發兌ス

- 第三項 春秋二回運動會ヲ開ク其細則ハ別ニ定ムルモノトス

- 第六條 第六條、第七條（九項）、第八條（三項）、第九條等ノ會務ノ各條ハ省略

- 第十條（二項）、第十一條、第十二條等ノ會議ノ各條モ同然

- 第十三條 本會ハ左ノ寄附金及會費ヲ以テ維持スルモノトス

- 第一項 名譽會員ヨリハ毎月其俸給（年俸ハ） 二百分一ノ寄附ヲ仰クモノトス

但名譽會員ニシテ本學部ノ職員ニアラサル者及本學部ノ職員ニシテ寄附ノ金額一箇年壹圓ニ充タサル者ハ毎年二回春秋ニ各五拾錢以上ノ寄附ヲ仰クモノトス

第二項 特別會員ヨリハ卒業受験生トナリタルトキ及卒業證書ノ授與ヲ受ケタルトキ各金參圓ヲ二回ニ徴收

シ其他ハ別ニ會費ヲ徴收セサルモノトス

但本會成立以前ニ係ル卒業生ハ一回或ハ三回(三箇年ヲ限リ)ニ金六圓ヲ徴收スルモノトス

第三項 通常會員ハ每學期各金貳拾錢宛徴收シ授業料日ニ之ヲ納ムルモノトス

第十四條 第十五條、第十六條、第十七條ハ省略

附 則

此會則ノ修正ヲ必用ト認ムルトキハ會員三十名以上ノ賛成ヲ得評議員會ニ提出スルコトヲ得ヘシ

以てその内容を察することが出来ると共に、大學豫科たる本部の龍南會とその趣を異にしてゐることが察せられよう。

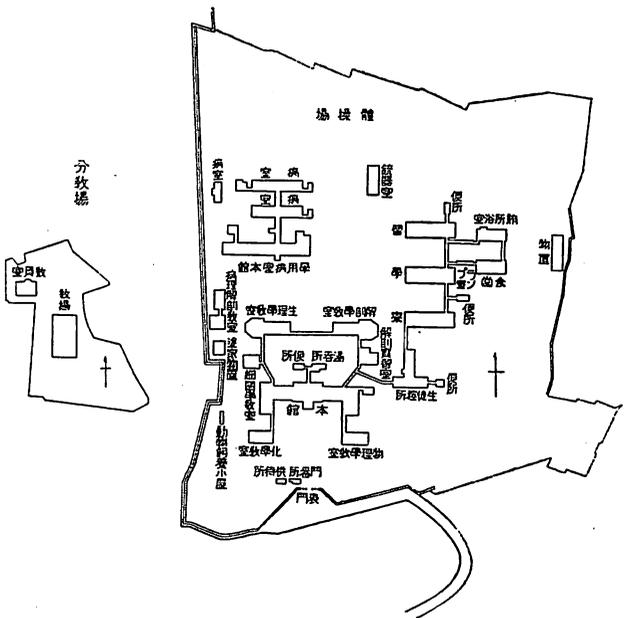
此外、醫學部に於ける協議會や、修學旅行等に就いても、記すべきことは多々あるが、一切之を省略する。

第五節 工學部の設置より分立まで

明治二十七年、第三高等學校には、法・醫・工の三學部のみに留めて、純然たる専門的教育機關と爲し、舊豫科生は第四・第五の二高等學校に分配せられ、第一・第二・第四・第五の四高等學校に於ては、夫々醫學部及び大

工學部主
事の任命

工學部の
設置



第五高等學校醫學部略圖

學豫科を置かれたことは既に述べた。然るにその結果、高等中學校設置區域の存在は意義を有しなくなつた爲に、二十九年六月には、來る三十年四月以降、該設置區域に依らざる儀と心得べき旨の訓令が發せられ、二十九年七月には、舊豫科を全廢せらるゝに至り、我が第五高等學校には、三十年四月十七日、文部省令第六號を以て、明治二十七年の勅令第七十五號高等學校令第四條に依り、修業年限四箇年の工學部が設置せられ、同年七月、本校教授櫻井房記氏が工學部主事を命ぜられ、茲に本部と二學部とより成る全國特有の高等學校となつたのである。

かくて同年、本校建物の東側に工學部生徒控所を、三十一年、理化學實驗室二棟の外教室實驗工場を、三十三年、實驗工場附屬家一棟を新築して、漸次内容の充實を計つたのである。而して三十二年十一月を以て改正せら